

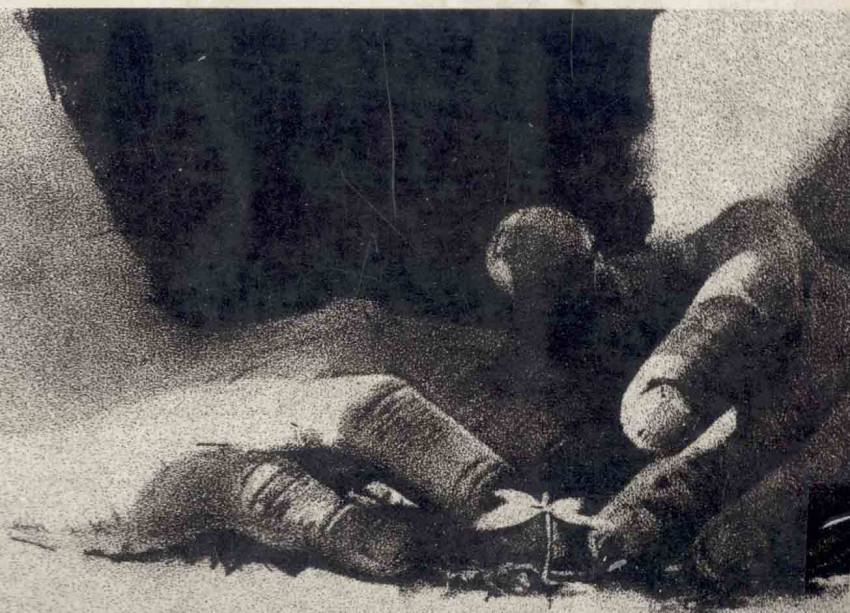
深沢七郎

Shichiro FUKASAWA

百姓志願

都会を離れた自由人の日記

毎日新聞社



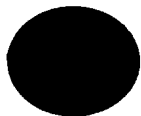
栗沢七郎
Shichiro Fukasawa



百姓志願



都会を離れた自由人の日記



毎日新聞社

百姓志願

¥ 360

昭和43年7月10日 印刷

昭和43年7月20日 発行

著者 © 深 沢 七 郎

発行者 星 野 慶 栄

発行所 毎 日 新 聞 社

郵便番号 100・東京都千代田区竹平町 1

郵便番号 530・大阪市北区堂島上 2-36

郵便番号 802・北九州市小倉区紺屋町 7-207

郵便番号 450・名古屋市中村区堀内町 4-1

印刷・図書印刷 製本・佐久間製本

百姓志願 目次

ワニ皮の腕こそ収穫	7
こまぎれ栽培	13
三隅平司さん(1)	17
豆ぶち	21
味噌	25
福島孝作さん	28
晴耕雨音	51
ネギは十五夜	56

三隅平司さん(2)	60
草の春	66
八束土手	70
花はおそかったナス	71
新井良平さん・堀部文之丞さん	75
梨	85
畑の中のお茶	90
農村選挙	94
農園天国	99
独立記念日	105
凶作	109
木村藤一さん(1)	112

嫁きさん 116

農休日 120

野まわり 122

木村藤一さん(2) 126

野菜 134

サンガの施餓鬼 137

一のこやしはあるじの足あと 140

三隅平司さん(3) 144

スキヤカヤたち 152

人為的豊作 156

遊ぶことも仕事のうち 160

ほおがけ 163

えびす講 167

ちぐはぐ農業 172

豊田甚吉さん 176

失業も終わりもない 189

じゃがたら十文半 193

作物と音楽 197

あとがき

カバードザイン 浅川 演彦
イラストレーション 毛利 彰

百
姓
志
願

ワニ皮の腕こそ収穫

東京にいと一カ年が早くすぎた。正月だと思っているうちに「もう桜が咲いた」という声を聞く。そう思っていると「暑い」といいだす。暑い、暑いと我慢していると涼しい日があるようになって、涼しくなれば寒い日もあるのだ。寒くなればすぐ、街にはクリスマスの飾りが目につくようになるのだ。クリスマスが来ればお正月である。まったく、東京にいるときは一カ年が早くたった。ところが、私は埼玉に来て農業をやったこの一カ年、なんと長いと思っただことだろう。移って来たのは晩秋だったから冬が過ぎて春になってから畑仕事らしい日を過ごすことになったのだから、まだ、ほんとに農業をやったのは十カ月ぐらいだろう。だが菜や大根を作れば二、三カ月ぐらいで収穫になるから十カ月では三回の種まきと収穫になるのである。種まきから収穫といっても毎日毎日、生長する日々の変化を見て過ごすのだ。二、三日、見に行かないと驚くほど生長して変化している。まったく野菜は生長が早い。草花なども好きで種をまいたがこれは生長がおそいと思えた。

食べられるものは早く生長するのだから都合がいい。これは、おそらく人間がつごうのよいように改良したのだろう。雑草は繁殖や生長がすさまじいといわれるが、それでも人間たちの作るもののほうがすさまじい。

稲に実る米は雑草にくらべてなんと多量に実になることだろう。ペンペン草、草ぶすまのすさまじい成育よりも結球白菜の大きい葉のほうがすごい生長力である。いや、もっと小さい葉っぱ——ほうれん草や京菜のほうが雑草より恐ろしい生長をしめすのだ。私たちは人間たちのつごうのいい、食べられるものばかりを作った。そしてなんと人間は自分勝手なことばかりしているのだろうと思った。

ラッキョウ、ナス、キュウリ、白菜、大根とわがラブミー農場は自給自足を目標に作ったのだが、あまれば農家と交換したりしたのだった。

去年はまだ農業は初めてだから出荷するつもりなどはなかった。また、出荷する自信もなかったのだが「売ればいい」といわれるほど、一年生にしてはよくできたようだ。キャベツもよくできたし、秋には落花生が一俵、大豆は二俵もとれて、これは意外なできただった。下手なのはネギ、これは台風のとこの手入れもなれなかったのだが、不作などという生意気なことばは使えないと思っている。

不作ではなく下手なのだった。ネギ、ソラ豆、カボチャ、スイカはほとんど形にならなかつ

た。それでも自分の作ったものだから妙な形、でこぼこの小さいのでもラブミー農場の者たちはゴキゲンで食べたのだった。

ラブミーのミーはもちろん私もミーだが、ネギや大根もミーなのである。ここではミミズ、青ガエル、ネコヤナギもみなミーだからショボクれたカボチャでも愛してちょうだいといっているような錯覚になっている。

はじめは畑がラブミーのミーだったが来たときからみんなミーになってしまったのだった。近くの農家の人たち、畑を通る人たちは聞かなくても教えてくれたのは意外だった。

私たち——二人のアシスタントたちがやっていると、わざわざ見にきてくれるときも多かった。間違った方法——土のかけかたが私たちはいちばんむずかしいことだった。その種類で土かけの量がちがうし、同じものでも時期ではちがうのである。土かけをやっていると、遠くの畑で仕事をしている村の人はわざわざ見に来て、教えてくれるのだ。私たちを心配してくれたし、また励ましてくれるのだった。とにかく「とてもできないだろう」と周囲の人たちにいわれてここへ来て「だいじょうぶだろうか？」と自分でも思ったりしたときもあったのだが、私の予定したことは実現したのだった。

だから秋になって私はホッとした。それは、農業を続けて行くことができることと決定した安心なのだった。好きな農業なのでつらいと思うことはないが、雨や風の日には畑に出られないのが

つらいことだった。ギターをひく手はワニ皮のような手になった。夜、ユカタなど着ると、この黒いゴツゴツしたワニ皮の腕がニューツと袖から突き出るが恥ずかしいとは思わない。ここへ来た収穫の手なのである。

九月のある日、私たちのメンバーにニュー・フェイスが現われた。ボクサー犬のオスで三ヵ月の子犬である。初めここへ来るとき、私がひとりだけの予定だった。それで、犬を飼うつもりで頼んでおいたのがやって来たのだった。いろいろな知人に頼んだのだが私のほしいのはボクサー犬だったので適当な子犬がなく十ヵ月かかって来たのだが、このときまで私たちは三人なのである。

ボクサーの名はボクシングのボクサーと同じ名なので「だいそれた名だけれどヘビー級のチャンピオン、カシアス・クレイの名に」と私たちはこの新しいメンバーを「クレイ」と呼ぶことにした。男ばかりの生活なのでメス犬が来ても変だし、オスでは男ばかりで物足りない。

「孤独はオレにまかせておいて」と犬はメスも頼んでおいたが、メス犬も適当なのがなく、クレイよりも二ヵ月おくられて十月の終わりにやって来た。ボクサーは栗色で鼻すじとあご、胸と両足が白くなっているのが普通だが、このメスの子犬は首筋のうしろにローマ字のLの線があるのだ。これは欠点かもしれないが、刀剣なら三日月正宗のような特殊な記号にもなるのだから私はLをみかづきに見立てることにした。Lの字は動けばみかづきに似てもいるのである。

ちょうど、森茉莉さんが寄ってくれた時だった。私が「三月月正宗、三月月正宗」というので「女だから三月月おきよといったらどうでしょう」と森さんが部屋の中でいつてくれた。それで私たちはこのメス犬を三月月おきよと名づけたのだが、これは呼びにくいので届けの名だけにして通称は「エル」と呼んでいる。

犬はもともと私は好きではないが、忘れていた雌雄の犬が来てくれて家族の仲間になって私たちは思いもよらない生活にはいったのだった。二匹の子犬はまだ赤ちゃんなのである。私とミスター・ヒグマ、ミスター・ヤギの三人はいつのまにか父親になってしまったのだった。

不思議なことにミーター自身にそれがつかないのだった。ラブミー農場は五人家族になったのである。気がついたら農家ではどの家でも犬を飼っているのだった。用心のためもあるが畑のモグラ、カラス、野ネズミなどを追う習性が役立つらしい。犬は人間とは違って、人間の足りない部分——用心性ではなく人間の足りない神経を補っているのだった。私たちの毎日はおそらく精神的には足りないものはないようだ。

ラブミー農場一帯は長十郎梨とイチゴ作りが盛んな土地である。とくに私の住んでいる上大崎はイチゴ栽培に熱心だし出荷量も味もすぐれているそうである。去年はイチゴの苗作におそい時期に来たから露地栽培しかできなかったが、今年はビニール・ハウスも建てることでできた。三月末から五月まで、きっと私たちはイチゴにもてあそばれてしまうだろう。露地栽培で

も土地のせいだろう、苗を植えておいただけで朝も大ザル一杯、夕方も大ザルに一杯で部屋の中はミツのにおいで一杯である。食べる気がしないのはにおいだけで満腹してしまうからだろ
う。食べないうちに翌朝のイチゴを摘まなければならないことになってしまふ。イチゴは出荷
するのだが、私たちはこんなになるとは思っていなかったのだ。『けさ取ったのにもうこ
んなに赤い』と私たちは大きいザルに一杯とって、もうとれないだろう、出荷してもこの一回
しか出せないだろうと思っているので出荷などはあきらめている。

野菜が農業だと思っているので、出荷などということは目がくらむような大きい事業に思い
込んでいたのである。「困ったな、こんなに実って」と私たちは、くさっていくイチゴをな
がめながら「イチゴの神様に怒られるかもしれない」そういいながらも取ってきてはくさらし
て、イチゴの時期は過ぎていった。

東京から五十キロ、そんなに遠くはないのだから、今年は、東京の幼稚園の子供さんたちを
招いてくさらないイチゴ摘みをやりたいものだと思っている。

こまぎれ栽培

私が東京からここ、埼玉県の菖蒲町に引っ越してきたのは、二年前の今月だった。ここへ来たのは農業をやりたいからだ。商人の家で育ったのに農業をやりたいなどというのは変だと思われるかもしれないが、とにかく私は自分のやりたいことだから仕方がない。

なぜあなたは釣りをしますか、と質問されるのと同じだろう。

農業は私の夢だった。映画スターになりたいとか、歌手になりたいという夢は若いころはだれでももつ夢である。農業をやりたいというこの夢は若いころからズーッと、五十歳になるまでつづいていたのだった。だからそれをよく知っている私の周囲の者は「とうとうやりましたねえ」とか「とうとう念願を果たしましたねえ」といつてくれたものだった。

今、私は「農業」という言葉を使うが、ここへ来るまでは「百姓」という言葉を使っていた。私の農業という意味と農作業は以前からいっていた百姓というイメージとはちょっとちがっていたようである。農業は少しずつ近代化されていて、なんとなく科学的な方法になってき

たようである。肥料、消毒、作付けなども進歩したし、また、施肥方法、消毒機なども、去年と、今年ではもうちがう機械になっているのだった。だが、私の夢は、やはり夢のもっているイメージと変わらせなくなかったのである。だから、私の農作業は、ここの村ではもつとも古い方式で、それも、全然素人のやりはじめた方式なのである。だから私は土を耕すのに鋤を使った。外の家はほとんどが耕運機でやっている。私は鋤でやりたい。そんな私の農業である。

作る物も外の農家とはちがって自分の必要なものばかりである。普通の農家では同じ種類のものを広範囲に作って出荷する。現在は農家でも自分の食べる野菜は買っているようである。これは私には信じられない農業方法である。たとえば、キャベツを十アール作る。そのキャベツは全部出荷する。だからキャベツ以外の野菜は買わなければならないのだ。私のは、キャベツをひとつね、コマツナをひとつね、ダイコン、ゴボウ、ホウレンソウ、コカブ、ナス、キュウリ、サトイモ、レタス、ピーマン、パセリ、と三十種類ぐらいを作付けした。もちろん、初めてなので出来ばえもよくないが、本職の農家の人が見ればメチャクチャな方法らしい。あとで「コマギレ栽培」という名をつけられたが、まったく、そのとおりである。コマギレ栽培は悪口ではないそうである。多くの種類を作ることは面倒なことで、丁寧な技術が必要だそうである。私はこのコマギレ栽培を当分つづけるつもりである。

鋤で土を耕すのは一年で変えてしまった。「豆トラ」という最小の農耕機だがそれを使うこ